

歌川廣重傳

〔三〕

同十二年、四月廣重獨行、甲斐に赴き、山間の奇勝を探り、十一月江戸に歸る。

按するに、廣重が京師に赴きし時の旅日記は、既に某の有となりたり、其の他に諸國に遊びし時の日記ありし由なるが、今其の所在詳かならず、惜むべし、傳へて其の家にあるは、僅に甲斐、安房、上總に往きし時の日記のみ、甲斐の旅日記は、天保十二年四月二日より始まり、廿三日に至り中絶し、同年十一月十三日より再び日記して、廿二日に至りて終はる、文長ければ、略して載すること、左のごとし、

(上略)四日晴天 野田尻を立て、犬目峠にかゝる、此坂道富士を見て行く、座頭ころばしといふ道あり、犬目峠の宿しからきといふ茶屋に休む、此茶屋、當三月一日見世ひらきよし、女夫共江戸新橋者仕立屋職人なりとの話、食客一人、これも江戸者なり、だんご、桂川白酒、ふじのあま酒、すみさけ、みりんなど賣る、見世少々きれいなり、犬目より上鳥澤まで歸馬一里十二町乗る、鳥澤にて下り、猿はしまて行道廿六町の間、甲斐の山々遠近に連り、山高くして谷深く、桂川の流れ、清麗なり、十歩二十歩の間にかはる絶景、言語に絶えたり、拙筆に寫し難し、駒はしまて十六町、谷川を右になし、高山遠近につらなり、近村の人家、まばらに見えて、風景た

ぐひなし、猿橋向ふ茶屋にて、晝食、やまめの焼びたし、菜びたしなり、大月の宿、富士登山の追分あり、右へ行て坂を下り、大なる橋あり、谷川流れすまじく、奇石多し、岩石そびえ、樹木しげり、四方山にして、屏風を立てしごとく、山水面白く、また物凄し、此大橋朽損じて、わきにかりに掛しと見える橋あり、これを渡りて道左右に分れあり、がてんゆかず、聞くべき人家もなく、往來もたえてなし、途方にくれて、しばらくたゞすみゐる、しばらくして山中より材木を背負ひ來る人にきゝて、下花咲に至り、又繩手を隔て、上花咲に至り、休む、かしくといふ茶屋なり、初狩の手前にて休む、江戸品川の人四人連に逢ふ、上初狩宿はづれに、茶屋あり、だんご、四本食ふ、この所の女房、甲府八日町の生れにて、江戸へも行きしとなり、且珍敷茶釜にて茶を煮る、白野宿へ一里、天神坂を越えて、宿へ入る、夫よりよしが窪といふ所あり、此に毒蛇濟度の舊地と記せし碑あり、一町程のほりて、百姓勝左衛門といへる者の家に立寄り、休み、右毒蛇の由來を尋ねれば、奥より老婆出て物語る、昔此所に、小股左衛門といふ大百姓あり、其の娘およしは、至て美女なれども、心あしく、けんどん邪見にて、つひに蛇身となり、其頃此邊に大沼あり、よなく出て、里人をなやます、親鸞上人來り給ひて、これを教化し給ひしより、此憂止みしとなり、小俣の家今にありて、二里程わき、今澤といふ所の一向宗の寺より、右の縁記を出だすよし、此老婆七十七八にて、去年

信州善光寺より江戸見物、江の島、鎌倉、大山へ参り歸るよし、尤も一人にて歩きしなり、其外いろ／＼物語る、粉麥の焼餅を馳走になる、此所を出て、黒野田宿、扇屋へ行く、斷る故若松屋といへるに泊る、此家古今きたなし、前の小松屋に倍して、むさいことはいはん方なし、壁崩れ、ゆか落ち、地虫座敷をはひて、疊あれどもほこり埋み、蛛の巢まとひしやれあんどん、かけ火鉢一ツ、湯呑形の茶碗のみ、家にすぎたり、黒野田泊、料理獻立、

皿(めざしいわし四ツ)汁、平(わらび、牛蒡、豆腐、いも、飯、皿(牛蒡さ、かし、醬油かけ)汁、平(豆腐、赤はら干物)飯、此日江戸品川の人三四人と度々出合、少々はなしする、きざあるゆゑ、はづす。

五日晴天、黒野田を立て、さ／＼峠にかゝる、半分程のぼりて休む、江戸男女姉弟連、遠州掛川の人、男女三人づれ、甲州市川在、禪坊主と俗一人にあひ、ものいふ、夫より又のぼりて、矢立の杉、左にあり、樹木生茂り、谷川の音、諸鳥の聲いと面白く、うか／＼と峠を越えて休み、下りにかゝる、

行くあしをまたといめけり杜鵑

鶴瀬を宿を過ぎ、細き山道十三町行きて、つるをの番所を通る、女は切手あり、此町にて飯喰ふ山うど煮付平なり、夫より横吹といふ原へかかる、此邊より江戸講中一とむれと連れだつ、右は山にて、山の腰を行く、左に谷川、高山に巖石そびへ、樹木茂り、向ふに白根ヶ嶽、地藏ヶ嶽、ハツヶ嶽など、

高峰見えて古今絶景なり、こゝに柏尾山大ぜん寺といふ寺あり、門前に鳥居あり、此邊よりさき、勝沼の邊まで名物葡萄を作り、棚あまた掛けあり、かつ沼の宿、此町ながし、こゝにて江戸連中と共に、常磐屋といふ茶屋にて、仕度、玉子とじてめし、飯安し、江戸ものは、横道にはいる、此茶屋出ると、又江戸姉弟と、市川の人にあふ、此道連甚だ面白し、夫より栗原を過ぎて、田中といへる所、ここに節婦之碑としるせる碑あり、昔享保十三己年、此所に洪水ありて、一村難儀におよぶ、此の時安兵衛、阿栗といへる夫婦の者あり、安兵衛癩病を煩ひ、其母も病に臥し、家貧くして難儀なるに、妻おくり僅のあきなひ、或は袖乞して、夫と姑を介抱せしに母はすでに空しくなりぬ、安兵衛申けるは、とても全快はかりがたく、此世にて人交りなり難きごう病なれば、川に入りて死すべし、汝は子もなく、年も若ければ、ながらへて、他に縁付、身を全ふすべしといふ、妻聞き入れず、此家に嫁してより、生きて爰を出でんとおもはず、兎ても覺悟を極め給はゞ、我も共に死んとて帯にて二人の體を巻き、洪水に飛入て死す、此事上聞に達し、公より節婦之碑といふ印を御建て下されたる由、夫より石和の宿に至る、入口の茶屋に、江戸講中大勢休み居る、殊の外にぎやか、こゝにて焼酎一杯、うどん一ぜん喰ふ、江戸姉弟の道連は、淺草にて梅川平藏、阿仲をよく知る人なり、勝沼より此邊、平地にて、道至てよし、夫より繩手を越えて甲府の町にとりつく、こゝに酒折宮

といふ舊跡あり、柳町より連にわかれて、七ツ時分、緑町一丁目、いさや榮八殿宅に着、此日入湯髪月代す、是より伊勢屋に逗留。

六日晴天 朝、かひや町芝居へ行く、狂言伊達の大木戸二幕見物、用事これあり歸る、幕御世話人衆中に對面す、酒盛あり。

七日晴天

八日晴天 朝、荷物到着、幕、霞の色漸きまる、世話人衆中竹正殿、萬定殿、岩彦殿、福勇殿、辻仁殿、岩久殿、村權殿、松彌殿、川善殿、鳴太殿、夜吉岡舎龜雄大人來る、長物語。

九日晴天 細工所きまる、晝過より芝居見物、狂言いろは四十七人、中幕(勸通帳の學ひは、萬屋を壽きて)安宅問答契情阿渡の鳴門一とまく、打出し、夫より町々ぶちつき、一蓮寺へ行く、境内稻荷、天神、其外末社あり、土弓場、料理茶屋などあり、恩光寺まへ料理屋にて、夜食、常さん御馳走になる。(按するに、細工所は幕を畫く場所なるべし、廣重もまた三世豐國のことく時として、畫をかくと言はずして、細工すといひたるものか。)

報告

遷喬會規約

一、本會は水彩畫(其他の洋畫)を研究し趣味を高むるを以て目的とす

二、左記條件を附して日本水彩畫會の會友となる

イ、會を一個人同様の會友として取扱ふ事

ロ、毎月各會員作品約壹枚を批評する事を得

ハ、通信は總て代表者を以て行ふ事

三、毎月第一日曜日午前九時より例會を催して作品の互評其他の研究をなす

四、毎月若くは隔月會員作品の集畫帖を作り會員間の回覽に附す

五、好時季を選び會員中有志者を以て寫生會を催す

六、雜誌みづゑを回覽研究す

七、日本水彩畫會より肉筆臨本其他參考品を借るとあるへし

八、會員中より二名の幹事を撰び内壹名會を代表し他の壹名之を補助して會務一切を取扱ふ

九、本會に於て月例會は福島小學校内に催し其他の事務は會を代表する幹事の宅に於て取扱ふ

十、毎月壹回會員の需用品を取纏めて購入をなす

十一、會費は當分毎月金五錢とす但茶話會等の場合は此限りにあらず又新規入會者は入會金として金參拾錢を納むるものとす

(所在地長野縣木曾福島町)

*

*

*

*